

習慣的な消費を好む家計において習慣形成仮説は成立するか？：日米パネルデータを用いた検証

岩本光一郎

愛知東邦大学経営学部

本稿では仮想的な質問により、恒常所得の変化時にどのような消費行動の変化が期待されるかを知ることができる「くらしの好みと満足度についてのアンケート」の日米パネルデータを用いて、「合理的習慣形成と整合的な消費パターンを選好する世帯」をピックアップしたサンプルを構築した上で、Dynan 型オイラー方程式による習慣形成仮説の検証を行った。得られた結論は、日米家計共に「合理的習慣形成と整合的な消費パターンを選好する世帯」からですら、習慣形成仮説と整合的な結果は得られないというものであった。しかも習慣形成パラメータの推定結果は、「習慣形成を選好する世帯」「習慣形成を選好しない世帯」で大きく異なるとは言えず、その理由の探索が今後の課題である。

JEL Classification Codes: D12

Key Words: 家計消費, 習慣形成, パネルデータ, 仮想的質問